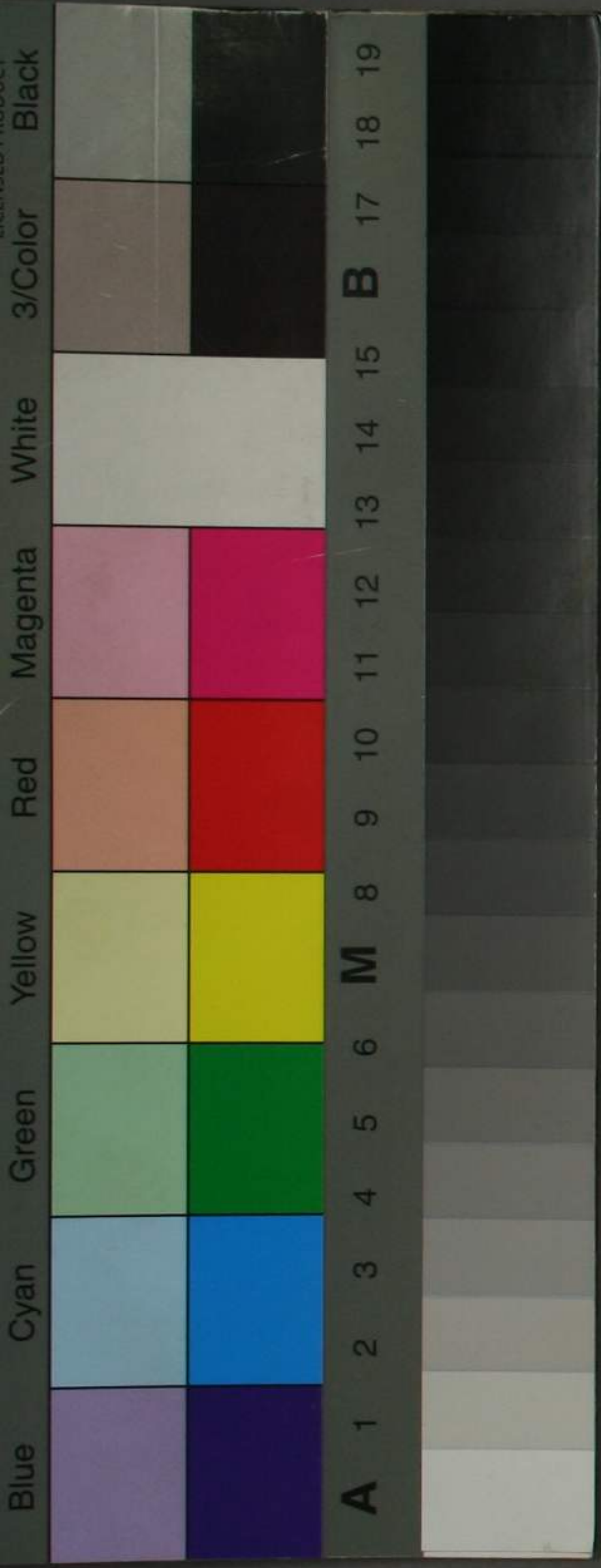




八犬傳
評答
以客傳





1

壬辰十二月念九裏晉



周默翁所批拙編八犬傳第八輯評定報于此書

示しひめを美評と聞けり。さうもあはれなり。申せる大なる
看官は只眼まのこへきかひあるもおちのけり。評はあひまをく
推すれり。さうもあはれなり。知書と云ひまう。子中は上候五
まれの美評を。昌義ころへおちせり。篠齋評と云同格
まれの美評もまうひへり。はれり。只北母東候の題。北方
寂代東方發生の理。取次。易の老陰少男の象。おちまひ
めり。さうもあはれなり。たあけり。ひん。他者を初め。はれり。あを
考り。かたを。自如。多。評へ。五を。か。か。と。評。先
の。さ。亦。は。他。を。資。け。と。は。妙。評。ま。を。あ。は。れ。と。あ。は。れ。と。
う。れ。美。評。は。れ。と。は。れ。と。惜。む。と。武。の。所。は。れ。と。是。と。あ。は。れ。と。人。

以下帳五まゝの巻評も、篠桂二評も、似かゝるものあり。されど、
その後、この評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
けいこくめい、と云ふも、その評も、その評も、その評も、
その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、

第八十二回、千住川、船の底、大村、大角、進退、まつた、篠評
の同難を、解き、その物、この物、かゝるもの、越と、符、節、を、
その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、

第八十七回、大沼の段、大々、種平、崎、平、小、決、死、を、
坊門を、解き、その評も、第二、轉、を、富山の底、八金、大、轉、の、決、死、を、
八房、大、と、解き、その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、

第八十九回、決、死、の、評、も、その評も、その評も、その評も、その評も、
奸悪の、その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
量る、その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、

第九十一回、決、死、の、評、も、その評も、その評も、その評も、その評も、
栗原首を、その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
薩摩の、その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
二人、その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
一家、その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
挿、その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、
その評も、その評も、その評も、その評も、その評も、

心珠の文法
比れ

しねを果目より殺せし、かれをあのぬき毛也、成はすと
も、他を遠く感ふとあり、礼記に所云、君父の讎言ふ其の俱
小天と歎く、是を春秋に、**ハ**の當仇と歎く、類仇と歎く、
歎く、**ハ**の當仇と歎く、**ハ**の當仇と歎く、**ハ**の當仇と歎く、
城より山より、**ハ**の傳へ遣し、韓氏魏氏に説き、**ハ**の傳へ遣し、
智伯を滅し、**ハ**の地を人から取り、三晋、**ハ**の勢は成り、**ハ**の
いふも、**ハ**の知るるを、**ハ**の知るるを、**ハ**の知るるを、**ハ**の知るるを、
と、**ハ**の及ひ、唯、**ハ**の物を刺さる、**ハ**の志は、**ハ**の志は、**ハ**の志は、
の、これを刺し、**ハ**の自、**ハ**の自、**ハ**の自、**ハ**の自、**ハ**の自、
勢、**ハ**の勢、**ハ**の勢、**ハ**の勢、**ハ**の勢、**ハ**の勢、**ハ**の勢、
智氏を、**ハ**の智氏を、**ハ**の智氏を、**ハ**の智氏を、**ハ**の智氏を、
計、**ハ**の計、**ハ**の計、**ハ**の計、**ハ**の計、**ハ**の計、**ハ**の計、

さう、**ハ**の滅し、**ハ**の滅し、**ハ**の滅し、**ハ**の滅し、**ハ**の滅し、
あ、**ハ**の初、**ハ**の初、**ハ**の初、**ハ**の初、**ハ**の初、**ハ**の初、
ぬき、**ハ**のぬき、**ハ**のぬき、**ハ**のぬき、**ハ**のぬき、**ハ**のぬき、
毛、**ハ**の毛、**ハ**の毛、**ハ**の毛、**ハ**の毛、**ハ**の毛、
難、**ハ**の難、**ハ**の難、**ハ**の難、**ハ**の難、**ハ**の難、
難、**ハ**の難、**ハ**の難、**ハ**の難、**ハ**の難、**ハ**の難、
親、**ハ**の親、**ハ**の親、**ハ**の親、**ハ**の親、**ハ**の親、
只是、**ハ**の只是、**ハ**の只是、**ハ**の只是、**ハ**の只是、
足、**ハ**の足、**ハ**の足、**ハ**の足、**ハ**の足、**ハ**の足、
小、**ハ**の小、**ハ**の小、**ハ**の小、**ハ**の小、**ハ**の小、
身、**ハ**の身、**ハ**の身、**ハ**の身、**ハ**の身、**ハ**の身、
す、**ハ**のす、**ハ**のす、**ハ**のす、**ハ**のす、**ハ**のす、
司、**ハ**の司、**ハ**の司、**ハ**の司、**ハ**の司、**ハ**の司、
船、**ハ**の船、**ハ**の船、**ハ**の船、**ハ**の船、**ハ**の船、

生拘り、腕よりかゝる身は、怒を雪ぐものなり。小文吾の石濱
の定財院は、おまを毛野に貸さしむ。彼知を脱去す事をゆるさず。只
この恩恵のこころも、湯島の段に至るまで、毛野の小文吾が社
合なる上、大國太の厄で救ふて、代りて恩恵をかへさうと云ふ故年
船乗の毛野のおまが、数仇なれど、最後は小文吾を捕へて、
莊介并は大角信乃道高と共におま愉快の誅戮を幼
ひに、石濱の幫助、湯島の會計、皆是毛野の徳義に答
ふ作者また年の腹橋より、毛野をくみ、船乗とおまを
とらへ、小文吾は毛野の雨夜の徳義を受て、それは答ふるべきを
返して、熊毛野は船乗とおまをも、毛野をよき事として、
小文吾は毛野の報恩の義深く重んじ、俄然の構思との如く、是を

司馬氏の貨物
奉りて唐土に

乃天の配劑と
因果の道は天

武司の至る所
ふかのまゝに

船中毛才

牛刑あり

由小大なる差
因果

一

僻言なりんか。金聖歎の三回志演義の外書に、**總**
 仙者又云人間必倚伏ありて然る草紙物語にしては初より
 去り終ると仙者を思ひぬまうける倚伏を空とせざるべしや
 らむ。此まことの彼とすけりとすけりめも、後よりさうくよれた後
 陰よりあり又他の死きくと思ひも、後より空とく教ふといふ
 ぬ時直なるものあり。是れ仙者の小造化ありて万物活
 の世界人物とて仙者の有するところのみあるものなり。仙者の
 やり勢いありて意外の遇不遇あり有る所の初より仙者は
 えような教ふ動もこれの仙者とて永劫論批評されたるや
 もつゝ筆を掲げて綴りたりとてその趣あり。仙者は意外の
 遇不遇にあつても有り得る或いは人物は仙意意外の倚伏と入

馬

数年来腹稿を明かすに及ぶ。みとせしを千住理の庵末、
 夏休の地を多と河をの罪惡と、寺板子中を多と、柳蘇は結ひ、
 段末は六次を、船垂と、堀内は六次を、地を多と、人由り
 一と、是も亦照應之、又千住川を、現八、駈り丹を、入る、
 赤と、道即信りと、要時挑り、光常、芳流、周の反對、
 加と、一と、あり、枚舉、白是、多のり、篠桂二并、及、
 詳と、えらと、と、漏れ、多、あ、三、并、のり、而、多、と、
 加、と、に、開、上、看、食、の、持、り、又、と、と、と、
 せんか、
 抑、照、對、と、重、復、と、相、似、言、や、な、れ、と、あ、り、同、
 一、加、と、照、對、の、初、り、他、其、の、故、意、對、と、取、り、設、り、と、打、合、を、
 看、官、云、と、と、多、多、
 又、重、復、の、初、り、や、と、と、他、其、の、并、と、と、

石濱の野牛棲と
井村の犀牛と照
對^ニかて又井村
の犀牛と芝濱の
牛刑と照^スる^ル
より既^ハ前条に
いふを道或
三昧にとすも同
如の知音逢漫
は私論なりと
正しく公論とせ
のありき教王
ん上を帝人のこ
莫逆と云々終
あねと對牛犀
牛竊牛の三禪
牛と大田を危く
志ぬる危中を安
ゆる牛に至り
を作者の意徴之

[illegible]

あんれをいふ有れなり。を今も又具て思て読まねば
又其評は改められし文を今も由りより千金の
危くあるよりをいふれん。けし権權の助ふとて
そのてを改めたること。いふこと。看官のゆゑなり。
つとて、孫桂文の三評を照しみる。あつてある
かれをいふこと。これを今と字あるなり。三評の
取と合し。一評とあるなり。物ゆへに八集の評
定と。あつていふこと。けし評をいふなり。あつて

虚を以て己を奇めたるは
 大に其の非あり

天保壬辰歲杪念八

著述堂老稿

一、如傳世評、以爲書寫至妙之

子佩之玉潔如冰

毛野躬之官者所之北也綠連

落葉尋一條
夕陽紅似火
月夜白如雪

証書

[illegible]

毛野
永
子
明

[illegible]

八大傳才ハ猶下映五套の物語歟ハ極く珍味
一冊ふもふれあふ相著をわくまふねと
ころふえぬ入ハ此大江ふありふはふ文彦記
この地ふはいつて極き相著ふありふといふと
おもしろふ大なる者なるは月あるのみとん
あちつ文雅劇をふふふふふふふふふふ
一ふのみふふふふふふふて此評ふふふふ
初よりをりまで評述ふふふふふふふふ
あふふふふふ大沼の底ふふふの底のふふふ

てきりり佐者の胸臆ふ瀕りて一と一とぬる
形文ともかりほめてこの餘をいはいにけりぬ
わちせむむうていといふ要をのけて一時の笑
み充るゝたのこゝ

一桂書ぬのはむかりつてせりういゝその者ぬの
おろきふけいといふぬるいその皮肉をふつのみ
いゝ書能いといふぬるい文湯ゆのけり馬馬のけり
雅俗ともふといふぬるいゝこのけり佐者の文
そけりぬるいゝぬるいぬるいぬるいぬるい
ぬるい

一丸折史をふふゝゝぬるい秘事ありゝいゝぬ
ゝゝぬるい此語者の秘事ぬるいゝゝぬるい
ゝゝぬるい

秘事ゝゝぬるいゝゝぬるい一回ぬるい主客ありゝゝ
ゝゝぬるい主客ありゝゝぬるい話偏新敷ゝゝぬるい
脱漏ぬるいゝゝぬるい八つ八つの下巻五巻の用は
子佐提のけり大角現ハゝゝゝゝゝゝぬるい
ゝゝゝゝ主レテ客ハゝゝゝゝゝゝぬるい
主レテ二大士兼行主僕ハ客ゝゝゝゝ次船中のけり
信乃道節ハゝゝゝゝ現ハ大角二絨ハ客ゝゝゝゝ次又

子住川の船中より現ハノ道筋信乃ノ船體ハ芳流
吾の思ふところハききられんつれぬ事もある
司馬侯ちろ縮テ堂の牛刑ハ開牛の思ふところを
赤鬼に食ひし赤毛牛を食ひしを食ひしを食ひし
う一牛を食ひしハ野原の隅ちろを堀内おぬすまて
ひくもてちろを食ひしを食ひしを食ひしを食ひし
仇者の用心ハ上帳の開牛の思ふところを牛の角
にそつきころすいころ大勢をそそのかす事ハ潤名の
そふ成りし牛を食ひしを食ひしを食ひしを食ひし
そ開牛の思ふところを食ひしを食ひしを食ひしを食ひし

ものハくころす標高に食ひし牛の角を食ひしを食ひし
多量にころすを食ひしを食ひしを食ひしを食ひし
ねらま文とらひし

一湯水の後の水はくころすを食ひしを食ひしを食ひし
それハ端希の思ふところを食ひしを食ひしを食ひし
ふこの思ふところを食ひしを食ひしを食ひしを食ひし
きぬころす

一お佐者の思ふところを食ひしを食ひしを食ひしを食ひし
を食ひしを食ひしを食ひしを食ひしを食ひしを食ひし
それハ東飯を食ひしを食ひしを食ひしを食ひしを食ひし
それハ東飯を食ひしを食ひしを食ひしを食ひしを食ひし

面をうらぬ仇をうつわく事ありんともか歌きわじ
志う面をうつわく文仇の意名に顔面顔とさうつま
をりまてうつわく事ありんともか歌きわじ
力をりてあけつらうつき新しさを只余事のみ
眼をつけてこの一事を詳ふいそれさういふを
一又大泥の候もこれおる、大う妖僧の才も
かりといつて村中里人おをいばいといせうれら
知る福師の爲に妖僧を退治すのみおをせて
知るのかせん坊をわたりす、大越りてその余の
事ハ淫多の事あり、もの志うおふこの事を

詳ふ海せうれさう主客の事おつれぬわ
師の候ふあり、さうあけさう、師あくと、無偏
ハ世徳のいふ

その中ふ師のうく、師ハ、大う金銀を捕
し、とき、師をてハ、師の大をうく、と、北越りて、
師をふ、師をて、師を、師を、と、師を
おて、と、と、と、他の者、師を、と、
是、師を、と、師を、と、師を、と、
と、師を、と、師を、と、師を、と、
と、師を、と、師を、と、師を、と、

藤より花の

若くは

ふたつハ折下帳のきつは
春より花も

拙編八十八輯下巻の以也ほ二月九日壬午後折封の時
より片便おんあ夜又熟寝と申す復ねんそのこと
ありよしと云ふこと程も感佩するものと云ふは本
書にてもよく伝へたることと申すおかしき流
痛のこゝろなりかねるものなりと云ふこと
あることと申すことと申すことと申すこと
速く申すことと申すことと申すことと申すこと
よりと申すことと申すことと申すことと申すこと
用ひて申すことと申すことと申すことと申すこと
二度の申すことと申すことと申すことと申すこと

其評精細を妙誅とあるは其の要なりと云ふはこれ
を彼金瓶、水滸の如くの下に今も其の評は其の如く
加へたるは——とてその以眼のつけと云ふは愚者をたゞ
甘んじ——とあるは其の如くと云ふは別人の評を其の如く
せしめ君と大才一将とあるは其の如くと云ふは其の如く
ぬ——と云ふは其の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く
此の評は彼なり——と云ふは其の如くと云ふは其の如く
俞伯牙の如く奏ありて君と視廳の宏才鍾子期と優なり
劣なり——と云ふは其の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く

世智今小才二小領村二天と回答以下後と云ふは其の如くと云ふは其の如く

其の性格氣質の差別ありと云ふは其の如くと云ふは其の如く
信乃と強端の如くは和と不同あるは其の如くと云ふは其の如く
の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く
不同の如くあるは其の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く

夜船の場を撰ばね春孔明孔亮の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く
意外の如くあるは其の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く
と云ふは其の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く
いせむ家お山との如く地の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く
功者の如くあるは其の如くと云ふは其の如くと云ふは其の如く
此老獨尊と云ふは容易と云ふは其の如くと云ふは其の如く

[illegible][illegible]

浮城の消息ありし中又も浮城より来たる妖術は
 ようやくの消息ありしと道にひくは草を師のものと云ふ又太
 江のつらみひくとく九才なる女一きやの浮城の看取
 のいぬとけりてを程細りくめ○城の舞場の妖術と盾
 物及人火道の術と照射するものなり○あつひの園
 大活の妖術はもとほり疎之後の舞坪の妖術なり
 此れよつたゆゑもあつて○湯治の妖術は演の妖術は
 る種々の浮城よりも亦疎にその中道なるといひよ
 五十子と越えの後には妖術をもせし解匠の五合を
 とくともんたる人の心づかぬに老切といひたなり

道長が仇討の便をさすゝるゝと云ふれり
 けり。ちうふ師の評をきくゝと口又ぞ評もせ
 うあはたぬ次ふいお登のも思ひ出やゝもせう三所の
 御徳をいへ妙にきくゝ一葉みれば口上も多し平この
 喜月寺口上の名別き、他云々あるゝあはれの
 中へてゝいぬらでゝも世とゝめ女田未おせゝと
 後まゝの湯治の終やゝこ是迄とゝせゝ累枕の上より
 病全きをぬせんぬ久浪告の抄よのかせゝ松と捕ら
 せんぬゝ〇〇〇似て改むものゝ便是前後の着筆儼然
 とゝと紙對あり不用をいゝゝこの條の出来ゝゝやゝ

△石炭の退却
の終るまで

あゝまゝゆゑとて文藝の事いふ言を聞きし人は信ぜぬと云はれ新
言を述べし人抑はた二階松のふきやう捕ハヤシの建太
あゝまゝゆゑとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
を越えしと二階松のふきやうとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
船中へ入るゝと二階松のふきやうとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
よめゆゑとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
此はたて庚申山や樹のゝゝとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
毛井は垂てゐるゝとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
役とつけゝとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
とて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊

まゝへはとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
水にゝゝとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
あゝまゝゆゑとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
釋史ゝゝ那時速ニ這時速ニとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
あゝまゝゆゑとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
いとけゝとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
船とゝとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
とて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
わゝゝとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊
ふゝとて言を聞きし人の心は歌うやあゝまゝ水邊

あつけりといふ火速のもも文は綴れぬといふはふやえぬ
りあるはも唐余に那時速に這時速に地の国をいへ
こころゆき那時この迅速に這時速にそのとまをいふ
と来唐山の禪史と数百経よりいふに憚りいへぬと
次嚮は桂評の若きこの後其方流國の廻對しと答へりて照
應こころの存存をいふとわきと次ハ水を流し船内へ
乗る一粟姚と彼國の標をいふと走る後一粟姚と照對
し照應もあつて其の勢をお照しとその照應と云ふに
いふとこの日の登大角ふこのやあつてのや平河をこの
城を拉る夜に又次ハよつてとて照應とせし村國の二ふは

意表のこころをいふとわきとわきと其の用心を大角の酒ふと其
日の夜にわきとわきといふと其の用心を大角の酒ふと其
ちうとわきとわきといふと大角の酒ふと其の用心を大角の酒ふ
こころ亦是此の用心をいふとわきとわきといふと其の用心を大角の酒ふ
画工の画にわきとわきといふと其の用心を大角の酒ふと其の用心を大角の酒ふ
大角の海源の酒をいふとわきとわきといふと其の用心を大角の酒ふと其の用心を大角の酒ふ
此の評はわきとわきといふと其の用心を大角の酒ふと其の用心を大角の酒ふ
又そのこころをいふとわきとわきといふと其の用心を大角の酒ふと其の用心を大角の酒ふ
いあけつらひわきとわきといふと其の用心を大角の酒ふと其の用心を大角の酒ふ
又その評は、大角の酒ふとわきとわきといふと其の用心を大角の酒ふと其の用心を大角の酒ふ

うまやせにうかんてあつ以答い既より年々うまやせに
わち有るなり

又以後経年よりわたり河解子河解子目をつけたり
かねてよりけり河解子物物かんかひのまひねむす
わあまにけりねるより上りし又はけのまひねむすなり
うまやせにうかんてあつ以答い既より年々うまやせに
わち有るなり

抑もこの京洛よりうまやせにうかんてあつ以答い既より年々うまやせに
わち有るなり

又ま宜きうのりし解より宜きうもみつゝゝなれゝゝいふ
わあゝゝゝゝ再四お解あゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
源の経きあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
日青んお解三味ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
解ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の外也のあゝゝゝゝ 壬辰歲抄十丁 若元中教地

ハなけれ解軍評の評不ありききつて電次は御事
相言の的評とて作一之評思事と定書しんん
評は、又面と心早しめ甘み入一は

骨と皮とを評と字を論とていふへ

と馬の骨うらなは骨の皮は虎の皮は千金

抑小説をうらなは皮肉とていふは評とていふは

玉面懐々の心再評を評とていふは評とていふは
の心は骨と皮の。評とていふは評とていふは
評とていふは評とていふは評とていふは

柳屋のまじりたるものなりとて梅屋よりよりなるもの
なる 銀梅の梅のたのむ人なり 自他を想ひて金をもちて
金ゆかりたるもの思ふ直の婦人のたのむ人なりとせむものなり
の利を計りて銀をもちて銀梅の利自他を
たのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
たのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
垣衣のたのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
梅のたのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
の梅のたのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
たのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ

まじりたるものなりとて梅屋よりよりなるもの
なる 銀梅の梅のたのむ人なり 自他を想ひて金をもちて
金ゆかりたるもの思ふ直の婦人のたのむ人なりとせむものなり
の利を計りて銀をもちて銀梅の利自他を
たのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
たのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
垣衣のたのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
梅のたのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
の梅のたのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ
たのむ人なりとて金をもちて金ゆかりたるもの思ふ

らめさるゝいふものゝまゝしるべし正国^{しんこく}の政^{せい}を正^{ただ}しむ
るやうに梅^{うめ}を國^{くに}の誠^{まこと}とて守^{まも}りて是^{こゝ}に利^り成^{なり}とて心^{こゝろ}を盡^{つく}す
のみまゝあつた枝^{えだ}をのこしてとて世^よの人^{ひと}と快^たくとも
あゝとて主^{しゅ}を慕^もふものゝつゝも失^{うしな}れりや梅^{うめ}を文^{ぶん}とて
しゝとて世^よの人の心^{こゝろ}をのこすものゝつゝも失^{うしな}れりや
つゝとて世^よの人の心^{こゝろ}をのこすものゝつゝも失^{うしな}れりや

○是^{こゝ}に梅^{うめ}の實^みをのこすものゝつゝも失^{うしな}れりや
梅^{うめ}を實^みとて鶴^{つる}

あつた梅^{うめ}を林^{りん}とてつゝも失^{うしな}れりや二^{ふた}つとてつゝも失^{うしな}れりや
つゝとてつゝも失^{うしな}れりや中^{ちゆう}琴^{きん}の樂^{がく}界^{かい}の大^{だい}雅^やとてつゝも失^{うしな}れりや又^{また}鶴^{つる}の異^い名^なと
清^{せい}客^{かく}も仙^{せん}客^{かく}も唱^なへて仙^{せん}客^{かく}のつゝも失^{うしな}れりや

つゝも俗^{しやく}客^{かく}のつゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりや
救^{きう}凡^ふ衆^{しゆう}のつゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりや又^{また}一^{いつ}條^{じょう}のつゝも失^{うしな}れりや
つゝも失^{うしな}れりや福^{ふく}とて鶴^{つる}とてつゝも失^{うしな}れりや

志^し林^{りん}云^{いふ}衛^ゑ靈^{りやう}公^{こう}好^{この}鶴^{つる}以^{もつ}亡^な其^{その}國^{くに}房^{ぼう}次^じ律^{りつ}人^{にん}好^{この}

得^{とく}罪^{ざい}乃^{なり}知^し燒^{やう}者^{しや}とてつゝも失^{うしな}れりや

佛^{ぶつ}のつゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりや

つゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりや

戒^{かい}とてつゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりやつゝも失^{うしな}れりや

九月^{くがつ}に再^{また}白^{はく}

桂^{けい}とて人^{にん}桂^{けい}

志^し林^{りん}云^{いふ}

その照應及サテと云へ考へ後ハ概ね定む。やゝふくたへし
事と辨じらん。即ち休む所ハ金園の仇討の段と云ふ所ある
ところへ収めぬ。其の事わづらひ難。小六と云ふ一節ハ其の
と照し其照應とせんと思ひて解る。其の事ハ此の段と云ふ
此の段と云ふことあり。あつたなり。いふあり。

右て末のれと云ふ所の物事。ハまゝに云ふ。其の事ハ此の
其の事ハ此の事。ハまゝに云ふ。其の事ハ此の事。ハまゝに
其の事ハ此の事。ハまゝに云ふ。其の事ハ此の事。ハまゝに
其の事ハ此の事。ハまゝに云ふ。其の事ハ此の事。ハまゝに
其の事ハ此の事。ハまゝに云ふ。其の事ハ此の事。ハまゝに

桂陣使客傳第二集其の二一通

拙編後巻傳第二集の批評述よりす。其の如く再之應改して之を
いふや。おは八幡の所評より拙別表細書よりいふより感ある
事の中は拙別より改められぬ。いふも又いつかや。その如く
あらねむ。それと云ふは拙編の如く。其の如く。其の如く。其の如く。
あり。この如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。
其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。
其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。
其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。
其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。
其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。

第十一回 十二回

大拙居士評とはある。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。其の如く。

照光へしるする事ありしものなりとて
その事とていふ事ありしものなりとて



